

お元気ですか

発行所・(福)横浜市社会福祉協議会
障害者支援センター

〒231 横浜市中区桜木町1丁目1番地
-8482 横浜市健康福祉総合センター9階
TEL 045 (681) 1211・FAX 045 (680) 1550
http://www.yokohamashakyo.jp/siencenter/

編集発行人・森 和雄

2020 / 3

お話の世界に引き込まれて

「竹の子会うさぎグループ」

緑区で活動する幼児の地域訓練会「竹の子会うさぎグループ」(以下、「うさぎグループ」)の活動内容は手遊び、外遊び、体操など。今回は、第三木曜日に実施しているグループ「あいえお」による読み聞かせの会に参加した。

いつの間にか集中

この日は、クリスマス会で、クリスマスマスを中心に進められた。小さな子ども用の椅子を半円状に並べ、椅子の後ろにお母さんが見守るように座る。新たに入会した子が多い四月は、じっと座っていることができず、走り回る子や大きな声を出す子もいて読み聞かせが難しいこともあった。それが数か月たつと、座ってお話を聞ける子が増え、一年たつとほとんどの子どもが集中して聞けるようになるという。

「あいえお」は、読み聞かせや朗読を中心に活動しているグループだ。活動場所のひとつである鴨居地域ケアプラザで活動を始めて間もなく、「うさぎグループ」の活動を知り、子どもたちへの



歌や寸劇もある

「あいえお」のメンバーが絵本を読む語り口は、穏やかで緩やかだ。いつの間にか自然と引き込まれていく。

学びの連続

「あいえお」のメンバーは毎回、反省会を行う。子どもたちが集中しづらかった回は、どうしたら聞いてくれるだろうかと皆で話し合う。取り上げたテーマが難しかったのか、話し方はどうだったか、お話とお話のつなぎはどうだったかなど。また、読み聞かせに集中できるよう、聞き取りやすい言葉ではっきり話す、大型絵本などを使う、絵本を見やすいように服は黒っぽいものを選ぶなどの工夫をしている。時には、協力者の方と一緒に考える。常に学びの連続だ。

お母さんは、「初めは椅子から離れて動いてしまう子もいるが、回数を重ねるうちに、椅子に座ってじっとお話を聞けるようになったので驚いた」と言う。



絵本を見やすいよう服は黒

長年「うさぎグループ」に関わる協力者の土田さんによると、「最初はお話に集中できずひとりが走り出すと皆がつられて走りまわってしまったが、今は逆に座っている子を見て皆が座っていられるようになった」とのこと。

「あいえお」の活動が、「うさぎグループ」で十年も続いているのは、なんといつても子どもたちの成長をみられる喜びがあるから。子どもたちが自分たちの読み聞かせを楽しんで、次は何をしようと考えることが張り合いになっている。

望遠鏡

今年、障害者関連にとつて大きな年といえます。まずは、一月七日に障害者自立支援法訴訟の基本合意から十年が経過しました。次に、一月八日から相模原障害者殺傷事件の裁判が裁判員裁判として二か月半二十七回という異例の予定で始まりました。また、夏には国連・障害者権利委員会では二〇一六年に日本政府が提出した「第一回政府報告」を受けて、障害者権利条約がどのように実施されているかの建設的対話(審査)がおこなわれ、総括所見(改善勧告)が出される予定です。さらには、東京パラリンピックがおこなわれます。

横浜市においては、第4期障害者プランの作成が大詰りをむかえます。

今まで障害者について関心のなかった人たちも、さまざまな形で障害者に関わることが増えてきます。ここで、どのような運動ができるかが私たちに問われています。障害のある人が他の市民と平等な生活を送ることができるとは、社会に向けて一緒にがんばりましょう。

(横浜市障害者地域作業所連絡会 谷口 実)

第六回 「重心生徒の進路状況に係る連絡会議」開催

重症心身障害(以下、**重心**)のある生徒の進路先確保は厳しさを増している。一月三十一日、教育、家族、福祉、行政各分野から二十二名が参加し、標記連絡会議が開催された。

進路先の現状

開会にあたり進路対策研究会相田委員長(市立上菅田特別支援学校)からは、社会資源の地域偏在、並行通所が増加している状況、並行通所をしてもなお在宅日がでてしまう生徒が倍増している現状が報告された。



会議の様子

市立中村特別支援学校の三浦氏からも二か所、三か所の並行通所を前提にしても週五日の通所先が決まらない生徒もいる厳しい現状が語られた。相田委員長は「重心生徒の進路状況は年々悪化していると言わざるを得ない。本人、家族は在学時から進路先の不安を抱えている。卒後も本人や家族が望む場があることを当たり前にしなくてはならない」と話す。

並行通所の不安：週五日の通所を！

横浜重心グループ連絡会「ばざばネット」代表の西村氏は、青葉区に日中活動の場を求めて活動をしている『未来の樹・あおば』で実施した調査結果を報告。「遠い場所ではなく、できるだけ近くに通いたい」、「並行通

運営の難しさと制度の見直し

所は本人の体力面で心配。やはり通所先は何か所にしたい」といった切実な思いを抱く家族が多数いることが判明したと述べる。同じくばざばネットワークの下山氏は、重心の方の日中活動先が足りない地域は明確になつていく。その地域を重点的に整備する仕組みが必要であると力説する。

行き場づくりの難しさを語った。参加者からは多くの提言がされたが、横浜共生会の萩原氏からは「多機能型拠点未設置地域における先行的な検討会設置と議論の必要性」「新しい事業所拡大と既存の事業所で重心の方をもつと受け入れることができるよう、その方策の再検討」「訪問看護の通所先への導入にむけた取り組みの強化」が提案された。これらの発言を受け最後に相田委員長は「課題は明確になつていく。切迫した状況を打開するため具体的な対応策を検討し、施策を確実に進める新たな場の設置も必要」と語った。

※「重心生徒の進路状況に係る連絡会議」は、重心生徒の進路状況に関する現状と課題を関係者で共有し、卒業後の進路対策を検討することを目的に進路対策研究会・横浜市社会福祉協議会障害者支援センターの共催で実施している。

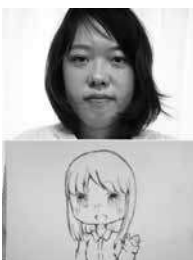


友愛の家(鶴見区) 菊地 香那さん

自然と手が動いて書けるので、話しながらでも大丈夫です」とさらさらと手を動かしながら話してくれたのは、鶴見区の「友愛の家」に通所している菊地香那さん。物心つく頃から絵を描くことが好きだという。



携帯のアプリを使って 鉛筆で書いてくれた菊地さん



完成!!

「学生時代の図工や美術の授業で決まった色や形のものを作るよりも、自由な発想で好きな色を使って作りたいと思って」と話す。イラストはふんわりしたかわいらしく柔らかいイメージ。好きな色は青色。見せてくれたたくさんのイラストも、濃淡や雰囲気は違うが、青系のトーンのもが多かった。「意識しない時はつい青色の服を着ているイラストを描いてしまう」と笑って話してくれた。イラストの服装にも凝っていて、ネットで検索してファッションのお手本にしているそうだ。最近パソコンや携帯電話に入れたアプリで描き、SNSにアップしている。一つのイラストを描くのに早ければ一時間、長ければ二日くらいかかるものもある。「影を付けたら、色の濃淡を付けることで立体感が出せると気付いた。最近はこの方法で描いています」と熱心に話してくれた。

第八回 災害シンポジウム
「被災地支援をとおして見えた課題と
横浜の取り組み」

十二月十一日、市内障害関係団体との共催により、「災害シンポジウム」が開催された。参加者は地域の方を含む約八十名、東日本大震災から約九年、被災地支援から学び、今後の横浜の取り組みについて考えた。

■災害時対応の課題
 ～田村さん～

人の多様性に配慮した組織や地域社会づくりを支援する、一般財団法人「ダイバーシ



災害時に備えた取り組みを語る

「新たな共助」の形
 提案するのは、広域での「新たな共助」の形だ。離れた地域同士で災害時に備えた協定を結ぶ、企業や団体と手をつなぐなど、地域内の共助だけではない仕組みづくりをしておくことで被災時に多様

な担い手が連携し、地域を支えることが可能になる。

また、地域の中では①支援者が少なくても対応できる備品、連絡体制、運営のルールを

検討しておくこと、②実践的な訓練を重ね、被災時の計画を見直し

続けること、③アセスメント力をつけることも必要だと訴える。「ア

セスメント力とは、地域全体の福祉ニーズを把握し、適切な支援につなげる力。ニーズを把握することで、対応

に困った時、どのような専門家とつながっておけばよいか分からない、訓練のあり方の検討にもつながっていく。そのためにも、多様な人が訓練に参加することが大切」と語る。

福祉事業所の備え

一方、福祉事業所は、より細かなシミュレーションが必要、と話す。例として、災害時のために「個別避難計画」を策定している他都市の実践例を紹介し、「いつ、どのようなタイミングで被災するか、具

体的に考え、対応方法を関係者で共有しておく。それにより、いざという時スムーズに必要な人に支援の手が届く」と話した。

■横浜では

泉区・葛野小学校地域防災拠点の取り組み

葛野小学校地域防災拠点では、拠点運営委員会に向け、防災拠点訓練などの機会を活用し、継続的に障害理解に関する啓発を行っている。取り組みのきっかけは、拠点運営委員の山上さんからの提案だ。元運営委員長の小山さんは当時を振り返り「災害時のためにも、普段から知り合っておくことは大切、障害理解の取り組みを、という山上さんの提案を迷いなく受け入れた。また、実際に障害のある本人や家族の話を開けたことで、理解が深まったと感じた」と話す。

一方、本人の立場で啓発の担い手となった、日中事業所に通う佐藤さんは、「地域の人に、東日本大震災の時に怖かったこと、障害のある人の中には、トイレの番を待つことが苦手、落ち着かないと走り出してしまう人もいることを伝えた。色々な仲間がいるが、地域の人に自分たちのことを知ってもらえると安心できる」と話す。

拠点の現運営委員長である東本さんは「取り組みが始まってから、様々な形で啓発講座を行っているが、地域の参加者からも、継続していくことの大切さや、子どもたちにもぜひ伝えたい、という声が上がっている。今後も理解の輪を広げていければ」と締めくくった。

日頃の関係性の大切さをこれからも発信し続けていきたい。

災害シンポジウム 被災地支援をとおして見えた現状と課題
 ～災害時に備えた障害者支援と地域での取り組み～

主催：横浜市障害者地域活動ホーム連絡会、横浜市障害者地域作業所連絡会、横浜市グループホーム連絡会、セイフティネットプロジェクト横浜
 協力：TEAM 3 事務局

主な内容
 第1部 誰ひとり取り残さない災害時対応をめざして～災害時対応の事例から見える現状と課題～
 一般財団法人 ダイバーシティ研究所 田村 太郎 氏
 第2部 災害時に備えた地域での取り組み～泉区・葛野小学校地域防災拠点～
 ◇地域から：葛野小学校地域防災拠点
 運営委員長 東本 上 氏
 元運営委員長 小山 義男 氏
 運営委員 山上 洋美 氏
 運営委員 佐々木 麻奈美 氏
 ◇支援者から：特定非営利活動法人ジョイカンパニー
 理事長 西谷 みどり 氏
 ◇通所者から：特定非営利活動法人ジョイカンパニー
 通所者 佐藤 まゆみ 氏

地域での生活について伝えたいと「当事者発・地域啓発支援事業」の取組

障害者支援センターでは、一昨年度から「当事者発・地域啓発支援事業」を実施している。この事業は、各区社会福祉協議会との協働により、住民の方々と構成する地域福祉関係団体等に対して、障害者や家族が講師となり、地域生活について伝えていく取り組みだ。今回は昨年十一月二十九日に港北区の「たすけあうまち城郷推進委員会見守り分科会」が主催した研修会を紹介する。

講師を務めたのは「横浜市車椅子の会」会長の宍戸かつ子さん。小児麻痺が原因で、普段は車いすを利用しながら生活を送っている。今回の研修会はテーマを設けての講義形式ではなく、参加者からの質問に宍戸さんが回答する形をとり、直接

的なやり取りの中から普段の暮らしの困りごとを知り、障害のある方を地域で支えていく上でのヒントを得るという趣旨のもとで行われた。

街の中で困ること

宍戸さんはまず、地域での困りごととして、公共交通機関の利用を挙げた。特に車いすを利用している方が不便に感じるのは、路線バスの乗車の場面だと話す。「昔に比べるとハード面の改善は進んだが、スロープの設置や座席の取り外しなどに時間がかかる。バスが遅れてしまう事による、他の乗客の溜め息や舌打ちが、車いすユーザーの心の傷となってしまう」と宍戸さんは語った。重ねて「車いすユーザーも多様だ。何十年と車いすを利用している人もい



会場からの質問に答える宍戸さん（中央奥）

いく事で、互いに自然な声掛けややり取りが可能になるはずだ」と語った。

参加者の声から

城郷地区民生委員児童委員協議会の中山千加子会長は「宍戸さんから直接お話しを聞いた事で、障害のある方の暮らしや困りごとについて、より実感をもって理解出来たという声に参加者からも多く寄せられた」と今回の研修を振り返る。

声掛けについて

今回の研修を受けて、同地区では車いすの乗車・介助などを体験する勉強会の実施を検討しており、地元の小中学生にも参加の呼びかけを進めていく予定だ。

参加者からは「どのように声をかけていいかわからない」といった質問もあった。宍戸さんは「車いすユーザーや障害者といっても、ひと括りに出来ない。とっさの声掛けも重要だが、普段からの対話を増やしていく事が大切。対話が増えて

障害のある方たちの暮らしを、より多くの人に身近に感じてもらいたいという思いが、安心して暮らせる地域づくりへ向けた実践につながる充実した研修会となった。



地域活動支援センター

めぐみ（南区）

目黒 明子さん

「とてもしつかりして、とても優しい」と通所者の方が賞賛するこの方は、ボランティアの目黒さん。

NPO法人めぐみに関わり始めて二十年。めぐみの歴史を長く見守ってきた方のお一人だ。地域でボランティア活動したいと思ひ、たまたま、ボランティア募集の張り紙を見たことがきっかけだった。当初は給食ボランティアとして関わり始め、現在ではお菓子作りの補助や、外出行事などの同行をしている。「一人一人、得意なことなどを把握しながら見守っている。みんな、お互いがお互いを思いやるその姿を見ていると、私の方が元気をもらえる」という。



めぐみ自慢のお菓子作りの作業中(右から2人目が目黒さん)

ボランティア活動から幅が広がり、町内の青少年指導員など、様々な活動にも長く携わっている。

「町内の方がめぐみのお菓子を注文してくれたり、めぐみは地域の小学校や保育園とも関わりがあったりと、障害がある方もない方も、このように身近に居ることが障害理解の一步。これからも、めぐみのボランティアとして貢献できれば」と語ってくれた。

今回の研修を受けて、同地区では車いすの乗車・介助などを体験する勉強会の実施を検討しており、地元の小中学生にも参加の呼びかけを進めていく予定だ。

地域での見まもり体制の充実を目指して 後見的支援室全体研修開催

後見的支援室では、制度の柱の一つである『見まもりの体制づくり』を丁寧に進めている。更なる充実を目指し、中野敏子氏（一般社団法人みつ蛍代表／明治学院大学名誉教授）を講師に招き、昨年十一月十五日、後見の支援室のスタッフを対象に研修会を開催した（参加者…一〇五名）。**生き方を知る**

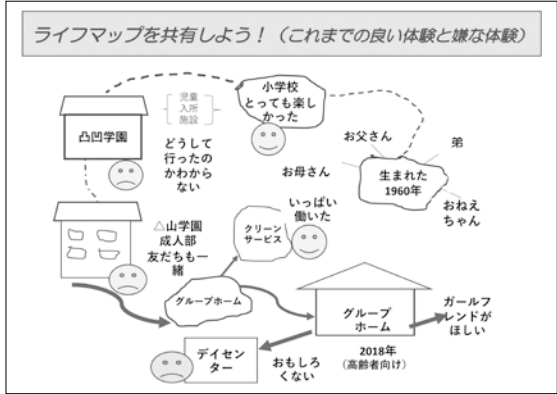


熱い想いを語る中野さん

居場所があつたのか、心地よい体験をしたきたのかなど、これまでの生き方がその後の暮らしに影響を与えていることが多い。障害のある人と、その人の生き方を共有する方法として、イギリスの学生が書いたライブマップを紹介した。これは、

「障害」を捉えるのではなく、『人』として捉える。その上で、本人の視線で、その人の生き方をしっかりと捉えていく必要がある」と語る。

人垣を作る 障害のある人の暮らしを支えていくためには、まずは『障害』を捉えるのではなく、『人』として捉える。その上で、本人の視線で、その人の生き方をしっかりと捉えていく必要がある」と語る。



暮らしを支えるために、たくさんの人垣（ネットワーク）を作ろうと、よく言われている。しかし、それがただの人垣であつたら、本人を束縛する垣根に過ぎない。中野さんは「本人の目線に立つと、どのような人垣が必要か見えてくる。そして、不安や緊張を一緒に和らげてくれる手だてを一緒に探してくる人垣が大切である。日常の生活でどれだけ知り合いを作る事ができていくか、

本人の事を知っている人を地域に増やしていくことが大事である」後見的支援室が、登録者以外の人のつながりを作る始まりの場となり、登録者が地域とつながるきっかけになるのではないか。後見的支援室で話を聞いてもらうことで、安心感が生まれる。そして、人とつながる安心感があることで、登録者が地域に出ていくことにつながるっていくと思う」などの意見が挙げられた。

ライブマップ講座 「障害のある人が自分らしく生きていくために」 —これからの活動や暮らしこ—

平成二十二年にスター会や特別支援学校など、トした横浜市障害者後見の支援制度。

この制度の目的の一つである「本人の将来をともに考える」ために作成されたものが、「障害のある人が自分らしく生きていくために」—これからの活動や暮らしこ—。資料はデータでも配布中。また、ライブマップ講座を希望するところはお気軽に支援センターまでご連絡を。

「障害のある人が自分らしく生きていくために」
—これからの活動や暮らしこ—
障害者後見的支援推進法人
社会福祉法人横浜市社会福祉協議会 障害者支援センター
住所: 〒231-8482 横浜市中央区桜木町1丁目1番
横浜市健康福祉総合センター9階
電話: 045(683)1211
※掲載している情報は2019年度障害福祉計画の内容に基づいております。令和2年 9月 発行

目的
障害のある人や家族が、これからの本人の活動や暮らしをイメージしたり、検討するときの参考にしてください。

あゆみ荘 だより

◆横浜あゆみ荘レスト ラン厨房等改修工事終 了のお知らせ

昨年より実施して
ました改修工事（レス
トラン厨房・エレベ
ーター・排管）が全て終
了いたしましたのでお
知らせいたします。

工事期間中は大変ご
迷惑をおかけしまし
た。

リニューアルしまし
た横浜あゆみ荘でゆっ
くりとおくつろぎたい
だけますよう職員一同
皆様のお越しを心より
お待ちしております。

◆WiFi利用可能 エリアを二階全エリア に拡大しました！

横浜あゆみ荘館内
のWiFi利用可能
エリアは、これまで二
階ふれあいホールの一
部だけでしたが、客室
を含めた二階全エリア
に拡大しましたのでど
うぞご利用ください。

なお、研修室等のあ
る一階では現在のとこ
ろご利用できません。



HEARTMADE通信 ハートメイドカタログ改訂

二年ぶりにハートメ
イドカタログが改訂と
なりました。

今回新しいカテゴ
リー、「ギフト商品」
を設けました。お誕生
日や記念日、ライフイ
ベントのお祝いや、お
世話になった方へ感謝
の気持ちを伝えたい。
しかし、何を選んだら
いいのかわからない。
そんな時にぴったりの
商品をそろえました。

お菓子の詰め合わせ
は、おなかもこころも
喜ばせてくれること間
違いなしです。

新掲載商品をご紹介
します。「完熟トマト
のスープパスタ」です。
こちらはドライ野菜と
パスタがセットになっ
ており、水とコンソメ
を入れてゆでるだけ。
簡単においしいスープ
パスタが出来上がりま
す。野菜がたっぷり



入っているので、栄養
満点。お仕事で忙しい
主婦の方、毎日コンビ
ニ弁当の一人暮らしの
方などにお薦めです。
同様の商品はギフト商
品のカテゴリーにも掲
載されています。

昨年十月に消費税が
増税になった影響で、
値上げをした商品が多
数ありますが、各事業

所のメンバーが心を込
めて作り上げた商品ば
かりです。ぜひ、ご覧
下さい。

【お問い合わせ】

障害者支援センター

ハートメイド担当

☎045(681)1131

※カタログ請求無料。

電話にてご連絡くださ
い。また、HPのオー
ダーフォームから注文
可能です。

支援センターだより

「感謝の集い」開催

「令和二年感謝の集
い」が、二月一日（土）、
横浜ラポールにおいて
開催された。

永年にわたり関係団
体に物心両面からご支
援・ご協力をいただい
ている方々へ感謝の意
を表し、交流を深める
ことを目的に開催して
いる。障害者支援セン
ターの主催。

当日は、受賞者・来
賓など約二百名が参
加、森センター長より
感謝状と記念品を贈呈

した。受賞者代表とし
て、ボランティアアグ
ループ マリン様、田
崎憲一様、株式会社
ルーク様から、活動を
始めたきっかけや利用
者の笑顔が活動の源に
なっていること、多く
の方に支えられ続けて
きた活動を今後も継続
していきたい、などの
ご挨拶をいただいた。

また、アトラクショ
ンでは、「おもしろ太鼓
会」と「D-dance」

にそれぞれ太鼓とダン
スをご披露いただき、
会場が盛り上がった。

感謝の集い受賞者

小越玲見様、天野映
子様、小野旬江様、鳴
海弓子様、北川公生様、
坂井孝子様、天坂淳子
様、田淵幸子様、鈴木
二三子様、松本登美枝
様、梅原見江子様、河
野靖司様、柴田義弘様、
高松美知子様、荻田志
津香様、山本ひとみ様、
太田洋子様、和田ヤエ
子様、西村和馬様

阿部妙子様、小山久照
様、森分梢様、鈴木仁
大様、益田早紀子様、
ボランティアアグルー
プ マリン様、日本郵政グ
ループ労働組合横浜中
央支部様、石川祐子様、
大石令子様、中山伸子
様、田崎憲一様、鈴木
伸様、酒井淳子様、平
井晃様、株式会社ルー
ク様



おもしろ太鼓会

式典終了後は、懇親会
に移り、参加者が交流
を深めた。



D-dance.KANAZAWA